

## 解 説

本校外国語活動部に所属する千葉幸江先生の実践を紹介します。5年生の外国語活動です。

本実践は、6月初旬（公開研究会）に行ったものです。クラス替えがあり、新しい先生、友達と関わり合うことが一層大事になってきます。そこであえてこの時期に「Hi, Friends!1」Lesson 4（好きなものを伝えよう）の単元をもってきました。

### 最終タスクを考えた授業構成を！

まず、この単元を扱う際の最終タスクから見ていきたいと思います。「Hi, Friends!1」に載っている活動の最終時間のタスク活動は、いわゆる総括的な活動が組まれています。ときにはスピーチの場合もありますし、インタビュー大会のようなものもあります。

本単元は5時間（千葉実践）で構成していますが、最終タスクを「クイズ大会を開く」にしています。タスクの要素はいくつか考えられますが、私は次の3点を常にポイントにしています。

- 1) 子どもの発達段階・学習時期に合った活動か。
- 2) 子どもの知的好奇心を満たす活動か。
- 3) クラスの関わり合いを十分に高められる活動か。

タスクは様々考えられますが、5年生のこの時期に、「クイズ大会」というタスクを通して、友達同士やALTとの会話などコミュニケーションを行う場面を大切にしておいていくことが、知的好奇心を満足させることにつながっていくでしょう。

### 表現に慣れ親しませるスムーズな活動を！

それでは次に「表現に慣れ親しませる活動」という点から見ていきたいと思います。最終タスクが決まりましたので、そこに至るまでの活動を1時間目の導入から具体的に考えていくことができます。本時は3時間目です。「レストランでのメニュー選び」をテーマに授業を構成しています。

ここで大切にしたいことが、「表現に慣れ親しませる」という点です。文部科学省の直山木綿子教科調査官が、以前次のようなことを強調されていました。

「子どもたちに話させる前に『何度もよく英語を聞かせる場面』をぜひ確保していただきたいと思います。しかし、聞かせるだけで自然に話せるようになるわけではありません。『何度も聞く』と『話す』との間に、橋渡しの活動が必要になります。それが『繰り返す』と『覚える』という活動です。」

さて、以上のことを千葉実践では、どのようにしているのでしょうか。まず、「自分が好きな食べ物を言う⇒相手に尋ねる」ことを学級担任（HRT）とALTとがデモンストレーションで行っています。その後、ALTが挙げた好きな食べ物を同じく好きな子どもに挙手させ、HRTの代わりに答えさせます。徐々にHRTの役割が子どもに移行していきます。何度も繰り返していくうちに、全員の子どもとALTとのやりとりが生まれます。HRTの立ち位置も教室前面から後方へと移動していくことで、完全に子どもとALTとの会話になるわけです。

子どもたち全員の動きを授業者が判断したところで、次の活動に入ります。ゲーム性をもたせた「I like しりとり」です。グループ内での活動になりますから、

子どもたち同士の会話になります。

ただし、ここでは制限時間を設けたために、子どもたちの会話が多少雑になってしまった感もありました。素早さよりも、相手を意識した丁寧な会話に重きを置いたほうがよかったですよ。

そして、いよいよメインの活動「メニュー選び」に入ります。前の活動で、子どもは表現に慣れてきていますので、比較的スムーズに取り掛かることができました。

「繰り返す」ことを、授業の流れに逆らわずに自然に、しかも楽しませながら子どもに身に付けさせていくことが授業者としての腕の見せ所と言えるかもしれません。

### 子どもをどう見取り、生かすか！

最後に、「授業者の見取りと子どもの変容」という点から見ていきたいと思います。

外国語活動に限らず、どの教科でも授業者の役割として「見取り」という行為があります。国語や算数などであれば、机間指導という形で子どもの思考を見取ることは可能です。しかし、子どもの動きが広がって



しまう場合など全員を見取ることは難しいことです。ここで勘違いしがちになるのが、「私（授業者）は、全員の動きを見取ることができなかつたために、子どもを生かすことができなかった」という反省です。「子どもの動きを見取るためにどうするか」を考えるべきです。千葉実践では、18ものペアを見取るために、「Sharing Time」を設けています。そこでは、やりとりの様子を意図的に振り返らせることで、「抑揚の付け方」「ジェスチャー」等の工夫を子ども自身に気付かせているわけです。授業者は、こういったメインの活動の際に、控えめな子どもに寄り添うことが必要になることがあります。授業者の「見取り」だけでは不十分になりがちなることをあらかじめ予測し、子ども同士にも見取らせているのです。授業者は、自分の見取りと合わせて、周りの子どもに広げるのです。

さて、授業の最後には、本時の活動を振り返る時間を設けています。千葉実践では、「〇〇さんは、相手の良いところに気付くことができました。しっかり聞くことができたからでしょう」と、声を掛けていました。そう評価を受けた子ども本人もですが、周りの子どもも活動を一緒に作り上げたことで嬉しい表情になっていました。

千葉実践には、こういったきめ細やかな授業構成が伝わってきます。

最近話題になっている「学級担任主導の外国語活動」というのは、学級担任が常に先頭に立って、なんでもするというものではありません。

あくまでも、コーディネーターとしての役割を意識しながら、目の前の子どもの姿を思い浮かべて授業を作り、実際の子どもの動きを見取り、それを生かすという一連の行為を大切にしていきたいものです。

（宮城教育大学附属小学校 山田佳哉）